

「失樂園」における混沌と秩序

大日向 幻

「失樂園」第二章から第三章にかけて、地獄を出た悪魔がついに地球をつきとめる、悪魔の冒険的探索の旅がしるされている。悪魔の旅をたどることによって我々は「失樂園」にあらわされたミルトンの宇宙観を知ることができる。悪魔は地獄を出て原動天に到着するまで「混沌」の中を通して行かねばならない。この「混沌」はあたかも十六世紀から十七世紀にかけての思想上の混沌を象徴しているかのごとくである。

当時の思想上、政治上の混乱はミルトンをまつまでもなく、すでにシェイクスピアも「リア王」において表現している。すなわちそれはリア王に代表される古い秩序を信ずる世界観と、エドモンドに代表される新しい世界観である。エドモンドが、

Thou, Nature, art my goddess; to thy law/My services are bound⁽¹⁾

という時、そのNatureはリア王の考えるものとは全く異なったものであり、それは「個人が自分自身の欲望の成就のみを考えるよう力づける力」であるとDuthieは指摘している。⁽²⁾

ミルトンの生きていた時代はシェイクスピアの時代の古い世界観と新しい世界観の葛藤から生ずる思想上、政治上の混乱がますます激しさを加えた時代である。そして「失樂園」はその混乱の外面的終結である王政復古前後に書かれたものである。さらに「失樂園」第四章のNiphates山における悪魔の独白は、悪魔の正直な内面を示すものとしてきわめて劇的効果の高いものである。この小論においては悪魔の旅と一応の旅の終りであるNiphates山における独白を吟味することによ

り、思想上の混沌を経た者がどう変化するのか、又 ミルトンの考えた新しい秩序とはどういうものであったかを探してみたいと思う。

I

まずミルトンの自然観、あるいは世界観を考察してみよう。それは「失樂園」第五章の四百六十九行目から四百九十行目までのラファエルのアダムに対する教えの中に端的に示されている。すなわち、それを要約すれば、全能の神は一人であり、万物は神から出て神に帰って行く。このように創造者と被造物は俊別される。と同時に、造られた側に「自然の階級」というものがある。神の下には天使がおり、その下に人間、そしてその下に動、植物が位する。⁽³⁾ そしてさらにくわしくいえば、天使の中にも階級があり、人間も男が女に対して優位をしめる。言い換えればミルトンは基本的にはルネサンスの時代の神を中心とする秩序ある宇宙観をそのまゝ受け入れていたのである。

それ故に罪とはこの自然の秩序に反することである。すなわち 悪魔は傲慢の故にキリストが天使の上に位することに耐えられず反抗する。又、人間は禁断の実を食べることによって神と等しくなろうとする。これらはいずれも自然の秩序に反するがゆえに罪とされるのである。「自然の階級」に属さないものは墮落した天使のみである。⁽⁴⁾ 又、地球上においても人間の墮罪後、自然界の秩序がくずれはじめることが「失樂園」第十章に示されている。

さて天文学的には「失樂園」における神を中心とする秩序を示す宇宙体系は中世の概念をほぼそのまま踏襲したものであり、いゝかえればプトレマイオスの天文学を中心としたものである。すなわち宇宙の中心は地球であり、そのまわりを回転するいくつかの天球に内側から、月、水星、金星、太陽、火星、木星、土星、Sphere of the Fixed Stars, Crystalline Sphere があり、一番外側に「原動天」があって全天体の日周回転をつかさどる。以上は大体ダンテの考えと一致するものであるが、重要な相違点の一つは、ダンテは地獄を地球の中心部においているの

に対してミルトンはこれを宇宙の外、「混沌」の中においていることである。⁽⁴⁾ すなわち「ミルトン・ハンドブック」によれば一番上が天、その下が上述の宇宙、その下に地獄があり、それぞれの間は「混沌」となっている。悪魔はこの「混沌」を通過して旅するのである。この混沌は何を意味するのであろうか。これは当時の政治上、宗教上のイギリスの混乱を象徴しているように思えてならないのである。

さて中世のプトレマイオス天文学を中心とする宇宙観はそのまま中世の人間観につながるものであった。すなわちマクロコズムの秩序はマイクロコズムの秩序をあらわすものである。ところが十七世紀は両方の概念、つまり世界観と人間観が揺いだ時代であった。すなわち外的世界の秩序の観念は十六世紀なかばのコペルニクスの太陽中心説の出現によって文字通りコペルニクスの転換を強いられていたのであり、人間の内面にかかわる宗教の問題は十七世紀の清教徒革命とそれに至る過程においてゆさぶられていた。そしてイギリスでは宗教と政治が常に同時に論じられたのであった。では次にミルトン及び同時代の人々の外的世界観と内的世界観がどのように動揺していたのか、いいかえれば、具体的にどのような思想上の「混沌」があったのかを吟味してみよう。

まず最初に「失樂園」におけるミルトンの宇宙観を掘り下げてみよう。「失樂園」の宇宙として地球中心説を採ったミルトンはコペルニクスの太陽中心説をどう考えていたのであろうか。「失樂園」第三章で太陽に向う悪魔に関して次のことばがある。

Thither his course he bends/Through the calm Firmament: but up
or downe/By center, or eccentric, hard to tell.⁽⁵⁾

(そちらへ彼は方向を定める、おだやかな天空を通過して。しかしそれが上昇なのか下降なのか、中心に向うのか中心から離れるのか、は定め難い)

すなわち太陽が宇宙の中心なのかどうかよくわからない、という意味である。あいまいと言えばあいまいな言い方である。同じ意味をあらすものとして、

Whether the Sun predominant in Heav'n

Rise on the Earth, or Earth rise on the Sun,⁽⁷⁾

(宇宙において他より権威ある太陽が地球の上に昇ろうと、地球が太陽の上に昇ろうとも)

というラファエルのアダムに対することばが第八章にある。要するに地球中心説でも太陽中心説でもどちらでも良いという意味である。これはミルトンがコペルニクスの太陽中心説をよく知っていたことを示している。渡辺正雄氏は「失明前のミルトンがみずから望遠鏡で月や星をながめたことは、ほとんど疑う余地のないところ」であり、「『失樂園』の中には……望遠鏡で発見された天文学上の新事実がたくさん盛り込まれて」いることを指摘している。⁽⁸⁾ すなわちミルトンは当時の新天文学に精通していたといつて良いのである。イタリア旅行中に老いて囚われの身となっていたガリレイをたずねたこともよく知られている。⁽⁹⁾

要するにミルトンは新天文学をよく知りながら、叙事詩の背景としてはより便利なプトレマイオスの天文学を用いたといえよう。しかしこのことは象徴的に考えれば意味深長である。プトレマイオス天文学は中世の科学上の真理のみならず、宗教的真理とも一致していた。というより、キリスト教によく合致するように修正されていたといった方が良いであろう。これは現在我々が見ても、神を中心とした秩序整然たる宇宙を示すにはうってつけであるように見える。ところがミルトンはそれをくつがえす新天文学の内容を認めていたのである。そして彼は最終的には、地球中心説でも太陽中心説でもどちらでも良い、と天使に言わせている。すなわち「失樂園」における宇宙観は一見整然とした秩序を示していながら、それが崩れる可能性をもっている。あるいはそれまで考えられていたのとは別の秩序を与えられなければならない宇宙であるといえよう。

ミルトンは科学者ではなかったから、最終的には科学的真理はどうでも良かったのかもしれない。しかし、彼が「失樂園」に新、旧の天文学をもち出し、どちらでも良いという考えを示す時、古い宇宙観の絶対性は否定されたけれども、まだ新しい宇宙観が徹底して受け入れられていないその時代の一面の混沌を象徴していると考えられるのである。

さて以上、天文学を中心とした自然観について述べてきたが、次に人間の内面に直接かかわる自然、すなわち理性とは同意義に用いられる自然について考察してみよう。自然という語は人間の内面に関わる意味をもってしばしば用いられているからである。

まず人間の理性にかかわる自然を自然法概念という観点からみてみよう。「キリスト教教理」によれば、ミルトンは神の律法には書かれたもの、すなわち聖書と、書かれていないものとがあるとしている。そして後者は「本来アダムに与えられた自然法に他ならず、そのある残り、あるいは不完全な光明がまだ人類の心に宿っている」⁶⁰

さて清教徒としてのミルトンが聖書を重んじたのはいうまでもないが、彼は離婚論その他において、自然と自然法に劣らぬ強調点を置いた。たとえば「離婚の教理と規律」の中には「モーセが自然法をくつがえすことはない」⁶¹ということばが見られる。ミルトンにとっては聖書と自然法が矛盾することがなかったのである。

この自然法概念はパウロのことばにもとづくものである。

すなわち、律法を持たない異邦人が自然のままに、律法の命じる事を行うなら、たとえ律法を持たなくても、彼らにとっては自分自身が律法なのである。彼らは律法の要求がその心に示されていることを現し、そのことを彼らの良心も共にあかしをして、その判断が互にあるいは訴え、あるいは弁明し合うのである。⁶²

(ローマ人への手紙 2:14~15)

これはいへば、聖書と福音を知らぬ異邦人にも自然にあらわされた神の法則が理性を通して理解されることを示している。これはルネサンス期の自然法概念にひきつがれ発展した。この意味でミルトンが自然法を、聖書と矛盾するものでなく、かえって聖書を支持するものと解釈する時、それはミルトンが当時の思想の伝統の中に位置したことを物語るものである。人は聖書を通して神の意志を知るのみならず、自然にあらわされた秩序を通して、理性によって神の意志を

知るのである。新教徒にとって聖書の解釈は自由である。個々の問題にあたって聖書の字句だけでは解釈しきれない場合には、人々は自然法の概念に頼った。離婚論においてミルトンが、自然および自然法の概念をひんぱんに用いた由縁である。

ところがここに重大な問題がはらまれていた。それは自然法が神を中心とする秩序を反映するものでありながら、自然法そのものについて様々な理解の可能性が出てきたのである。すなわちそれは解釈の多様性というプロテスタンティズムのもつ弱点の故に、一見秩序ある概念でありながら、秩序を失う運命にあったといえよう。

それはまずピューリタニズムとアングリカニズムの対決にあらわれる。すなわち前者は国王を弾劾するのに自然法を用い、後者は国王を擁護するのに同じ概念を用いることになった。ハラにしたがってその具体例を一つ見てみよう。⁴⁴ すなわち議会側に立つヘンリ・パーカーによれば、墮罪前のアダムは良心、つまり自分の心に書かれた完全な自然法を持っていたが故に為政者を必要としなかった。しかし墮罪によって人間の良心は不完全になったので、人間同志がうまく生きていくには社会契約と支配者が必要となった。しかし支配者が暴政を行なう時には、自然法が再び働いてこれを是正しようとする。英国ではそれが議会という形で現われている。議会は市民の良心を代表するものである。これに対して王党派のヘンリ・ファーンは生れながらの支配に服従しないことはキリスト者の良心と一致することはないといい、ディグズ卿は、王に対する反抗は社会契約を解消し、市民の安全を減ばすものであると反駁した。このように両サイドは同じ概念を用いつつ、真向うから対決したのである。

この解釈の多様性というプロテスタンティズムの弱点は、さらにピューリタニズムそのものの中にもあらわれる。これはミルトン自身のピューリタニズムが、最初は議会の多数派である長老派と同じでありながら、「アレオパジティカ」以降、独立派へと移行せざるを得なかった事情にもよく象徴されている。クロムウェル自身の立場も微妙なものであり、彼は過激な少数派に属しながら、水平派ほどには

過激になることができなかった。「クロムウェルを指導者とする独立派……は王とその一派との妥協を策している長老派に対する対策とともに、彼ら自身よりもさらにラディカルな政策を要求する小市民、小農民を基盤としている、いわゆる水平派（Levellers）に対する態度も決定しなければならなかった」のである。⁶⁴ こうなると古い秩序を攻撃することは易しいけれども、それに代る教しい秩序、概念を生み出すことがいかに困難であるかが実感されてくる。クロムウェル自身、二人の国教会会員に、国教会に代るものとして、どのような教会制度を望むのかと問われて、「私は自分の持ちたくない制度はわかっているが、どのような制度を望むのかはわかっていないのだ」と答えたという。⁶⁵ まことに当時の清教徒達の思想の多様性から生じる混乱を象徴したことばだと言えよう。

さて最後に、清教徒間の思想の多様性の一例として学問にたいする考えをみよう。当時、一般民衆は福音を信ずるのに足るだけの知恵と知識を生れながらに持っている、そして学問が説教を妨害することがあってはならない、という考え方が清教徒の間にあった。聖霊が直接単純な人間の魂を導くとすれば、そしてそれこそ人間の救いにとって最も必要なものとすれば、他の学校教育はどこに必要性があるのか。学問は魂の救いを助けるというよりはむしろ邪魔になるのではないのか。この考えから後に多くの平信徒説教者が生れてきたのであり、いかげすバニヤンもこのような考えをもつ一人であった。⁶⁶

このような学問軽視の傾向が清教徒の間に勢力をもちつつあったのに対し、たとえばミルトンが学問をどのように考えていたかは、いまさら述べる必要もないであろう。が、「教育論」のはじめにでてくることばを一つ引用してみよう。

学問の目的は再び神を正しく知ることによって我々の最初の先祖の失地を回復することである。⁶⁷

ミルトンにとっては、ヒューマニストとしてのみならず、キリスト者としても、学問は欠くことのできないものであった。学問をとってもこれほど考えに開きがある清教徒達が一つの改革をめざしたのである。まことに改革の実践は、困難かつ複

雑なものであったろう。

III

さてここで「失樂園」にあらわれた「混沌」の様子と悪魔の旅を、第二章と第三章を中心に見てみたいと思う。「混沌」(Chaos)がこの叙事詩において初めて出てくるのは第一章十行であり、天と地が「混沌」から生れた、と書いてある。そしてその前に悪魔とその部下を罰するため神が「混沌」の中に地獄を作ったのである。これだけのことを考えると、「混沌」それ自体は善でもなく、悪でもなく、いわば中立的存在であるといえよう。

第二章後半において「罪」に地獄の門をあけてもらった悪魔は、「混沌」の状態を目のあたりにする。その様子を描いた箇所を一つ引用してみよう。

Before thir eyes in sudden view appear
The secrets of the hoarie Deep, a dark
Illimitable Ocean without bound,

.....

And time and place are lost; where eldest Night
And Chaos, Ancestors of Nature, hold
Eternal Anarchie⁽⁴⁾

(彼らの眼の前にとつぜん年老いた深淵の秘密が現われ出る。それは境界なく無限に続く大洋である……時と所は失われ、被造物の祖先にして長兄である夜と混沌が永遠の混乱をつかさどる)

文字通りここは混沌とした場所である。あらゆる世界は「混沌」から生れることを思えば「混沌」自体も神が創造したものである。しかしこれは他の世界が作られる一段階前の状態であり、秩序を与えられていない場所である。「混沌」に関しては神はそのなすがままにまかせておられるのである。神がつくったものの中でこの

ように秩序のない世界があるとは非常に興味深いことである。ちなみにミルトンは一般に受け入れられていた神による「無からの創造」を否定していた。⁹⁴「深淵」は神の一部であり、したがって永遠に続くものである。神がそこから新しい世界を創造しない限りは擬人化された「混沌」の支配は永遠に続くのである。

これを十七世紀の政治的、思想的混沌と結びつけて考えてみるとどうであろうか、混沌があること自体をミルトンは嫌っていたのではないかもしれない。まして彼はその改革の中にあって指導者となり、祖国の栄光を歌う詩人になろうとしたのである。重要なことはその混沌の中からどのような秩序を得るかであったろう。「失樂園」第七章によれば、神が「身をひいている」(“I……my self retire”)⁹⁵が故に、「深淵」ではまだ創造が終っていないのである。つまりそれは神の意志による。同じく、宗教上の混沌に関しても、神が身をひいて人間のなすがまゝにまかせておられるが故に、混沌が終らないといえよう。

「深淵」においては四元素が互いにあらそっている。そして秩序がないのであるから、「偶然」が「混沌」の次に位して支配している。⁹⁶ 悪魔はこの無限の海において「英雄の探究」を試みる。まさに伝統的叙事詩における英雄としての面目躍如といったところである。彼は翼をかってうまく飛んで行こうとするが、無限の海をどんどん下降してしまう。これを助けるのが暴風のつき上げである。⁹⁷ 全く悪魔は偶然によって恐しい目に会い、また偶然によって助かるというわけである。人間世界のことばでいえば、悪運強しとでもいうのであろうか。悪人が偶然に助かる可能性をミルトンは示唆している。

さてこのような「混沌」の支配する世界を旅するのはきわめて困難なことである。秩序をはなれた悪魔はいつ目的地につけるかというあてもないまま冒険を試みて「偶然」に助けられるが、秩序を信ずる者は天の助けなくしてこのような世界に行くことはできない。詩人が第二章の後半において「混沌」と「夜」の世界を歌い、第三章においてまばゆいばかりの天上の光を歌うため再び上昇するには天の助けが必要であった。したがって詩人は第三章の初めのところでいう。

I sung of Chaos and Eternal Night,

Taught by the heav'nly Muse to venture down
 The dark descent, and up to reascend,
 Though hard and rare: ⁽²⁰⁾

(私は、天の詩神に教えられて、くらやみを下降し、又上昇して混沌と永遠の夜を歌った。道はけわしく、困難であったけれども。)

この夜と混沌はミルトンの盲目の状態とそれによってもたらされた精神的苦悩をも象徴しているが故にあわれである。第一章、第二章で地獄と混沌を歌い、第三章で光を歌うためには、天の助けが必要である。地獄には光がない。あるのは darkness visible のみである。第一、二章と第三章冒頭の闇と光のコントラストは見事である。しかし詩人は闇の中にある時も天の助けによっている。盲目という苦悩の中にある時も内なる光を見出した詩人は心に安らぎをおぼえ、光の讃歌を歌うことができた。

詩人の想像世界における下降と上昇は、第三章五百一行目以下で悪魔の見る、天国の壁とエデンの園を結ぶのはしごのようなものにつながる。これは旧約聖書においてその上を天使が昇り降りするのをヤコブが夢に見たあのはしごに似ている。宇宙（世界）と天国の間は「混沌」が支配しているのではあるが、やはり二者を結ぶ階段があり、天使や神を正しく信ずる者はそこをのぼりおりすることが許されている。しかし、悪魔はこれをいくらぼっていても天国の扉は彼には閉ざされている。さらにこのはしごは、人間の墮罪以後、地獄と宇宙の間に出来るハイウェイと対照をなすものである。人間の墮罪以後は「罪」と「死」が自由にその大道を往来するようになるのである。

詩人が悪魔の冒険を追っている間に、詩人自身が若い時にもっていた野心を捨てていることにも注意したい。先に詩人および天使の上昇と下降に言及したが、地球から上昇するものの中にはまるで価値のないものがある。それらは価値がないため地上にしっかりと根をおろすことが出来ないで上昇してしまい、「愚者の楽園」とよばれる Limbo の中に入ってしまう。人間の墮罪以前には存在しなかった、おろかな野心、希望などがそれである。すなわち、

Both all things vain, and all who in vain things
Built thir fond hopes of Glorie or lasting fame,
Or happiness in this or th' other life;⁶⁴⁾

(あらゆるむなしいことと、この世または来るべき世に、ほまれ、あるいは名声、あるいは幸福のおろかな望みをむなしくかけた者達)

である。

ここにはこの世での栄光を求める者達と共に、人間的努力によって来るべき世において栄光を得ようとする者達が批判されている。同時にミルトンはかつての自分をここで批判しているようである。国家の栄光を歌う詩人になろうとした若き日の野心のことである。これは1655年に自分の盲目について書いた「ソネット十九番」にすでにみられる。

…… But patience to prevent
That murmur, soon replies, God doth not need
Either man's work or his own gifts⁶⁵⁾

(が、忍耐はその不平を遮ってすぐ答える。「神は人のわざも才能も必要としない」)

と彼は書いている。これは当然ミルトンが散々苦しんだ末に出てきた結論であろう。祖国のため働いてその結果視力を失ない、しかもまだライフ・ワークというべき叙事詩は書いていない。このような状況の中で彼が達した結論は、結局は神の前に人間はあまりに小さい存在であり、最終的には、そして大きな観点からみれば、人間の野心が遂げられるか、遂げられないかはどうでも良い、ということであった。重要なのは神に仕えることである。

ミルトンが「ソネット十九番」にうたわれた如き気持ちで落着いていたとは思えない。これはいわば何とか自分の焦りと絶望をなだめようとする気持ちを歌ったソネットであろう。重要なのは忍耐して待つことであると自分にいい聞かせている。しかし同時にミルトンは失明をふくむ清教徒革命における苦い経験を通して

若き日の野望と自信を反省したのも事実であろう。「失樂園」を書いた時にはその気持ちがかかなり落着いていたと思われる。したがって彼は安心してあらゆる虚栄心を、Limbo の中に入れてしまうことができた。

しかし、もちろん 悪魔は傲慢を捨てるようなことはしない。彼は太陽の番人ウリエルをだましてついにエデンの園の位置をつきとめ、そこに到着するのである。

IV

さてこゝで第四章第三十二行目から第百十三行目に歌われている Niphates 山における悪魔の独白を聞いてみよう。ここには 第一章、第二章で雄弁をふるった悪魔とはまるで別人のごとき悪魔が現われる。誰も自分のいうことを聞く者はないとの安心感からであろう。彼はすべてを正直に告白し、過去、現在、未来にわたる自分の姿を反省する。

これを読むことにより、第一章、第二章における英雄的悪魔の魅力は減じてしまう。しかし読者、特に現代の読者が心ひかれるのは英雄的悪魔ではなく、自分の内面、すなわち 実存的苦悩を正直にさらけ出した悪魔ではないだろうか。悪魔の弱さを知ることにより、一方の魅力はなくなると同時に、別の意味での魅力が出てくるといえよう。

叙事詩の構成にもこの悪魔の独白は重要な位置をしめている。すなわち、人間の墮罪は地球上のエデンの園を舞台として行われるが詩人は人間を誘惑する悪魔に充分な動機づけを与えなければならない。悪魔の墮罪はキリストに対する嫉みに端を発しているが、こゝで悪魔に独白させることにより、詩人は読者に悪魔の心の中を見る機会を与えている。悪魔のことばを聞いてみよう。まず彼は太陽に呼ばかける。

O thou that with surpassing Glory crown'd,
Look'st from thy sole Dominion like the God
Of this new World ;⁶⁹

(汝、この上ない栄光につゝまれた者よ、お前はこの新宇宙の神の如く一人で支配しているようだ)

闇の支配者である悪魔にとって最もいやなものは光である。単に物理的明るさのみならず、それは神の栄光をあらわし、自分のみじめな姿を明らかにするからである。太陽の光にこゝで重要な意味をもたせることにより、先に述べた如く、ミルトンが太陽中心説を徐々に認めつゝあったことが示唆されているようでもある。

悪魔はさらすんでなぜ自分が神に反抗したのかを反省する。いうまでもなく、傲慢と野心によってである。では神に与えられた立場は満足すべきものではなかったのか。神に与えられた務めはつらいものであったのか。そうではない、と彼ははっきり言う。

……nor was his service hard.⁸⁹

(彼への奉仕もつらいものではなかった)

これは現在の自分のみじめな姿と、以前の天上の栄光とをくらべて、つくづくと感じ、心の底からでてきたことばである。それでは自分が大天使であったことがいけなかったのであろうか。それ故に傲慢になってしまったのだろうか。

O had his powerful Destiny ordaind
Mee some inferiour Angel, I had stood
Then happie;⁹⁰

(神の定めの方が私を身分の低い天使にしていたら、私は喜んでそのまゝでいたろう)

これは興味深いことばである。論理的には、その通りに考えられるからである。Harry Blamires は悪魔のこのことばを真面目に受け取るのは困難であるといっている⁹¹。神への反抗を最終的にやめることができないという悪魔の本質を考えれば、結局、彼は口先でこういっているだけだ、ということになる。しかし、悪魔のおかれたみじめな状態を中心に考えてみればどうであろうか。こんなことなら、た

とえ身分は低くても 天上にいたほうがましであった と考えるのも当然のように思われる。

しかし、悪魔自身、自分でこれに答を出す。すなわち、たとえ身分が低くても、他の大天使が反逆した場合には 自分もついていっただろう という可能性である。What-might-have-been と what-has-been が悲しい一致を見せている。結局のところ一定の方向にしか 進めない悲劇の主人公としての 悪魔の姿がこゝにあらわれている。自分には 自由意志が与えられていた。そして 悪を選んだ。もう弁解の余地はない。したがって、

Which way I flie is Hell ; my self am Hell ;⁽⁸⁰⁾

(どちらへ私が行こうと地獄があるのみだ。私自身が地獄なのだ)

ということになる。すなわち 本質的性格は場所を変えることによって変えることはない。悪魔は「混沌」を通して色々な冒険をして やっと目的地にたどりついたけれども、結局同じことである。神の支配、神の怒りから 逃れることはできない。ミルトンも 十七世紀の混乱において 色々な経験をしたけれども、結局、内面が変らなければ、人間の本質は変らないことを 痛感したのであろう。内面が変らなければどんな危険をおかして経験を積んでも 同じことである。それでは内面を変えるにはどうすれば良いのか。

…… is there no place

Left for Repentance, none for Pardon left ?

None left but by submission ;⁽⁸¹⁾

(悔い改めの余地、許される余地は残っていないのか。降伏による以外はない)

これは悪魔の弱音といえは弱音である。第一章、第二章のあの壮大な姿は見るべくもない。またこれは 神への反逆を本分とする悪魔が 後戻りするぎりぎりの線、極限であるといえよう。第三章において神はすでに 人間は許すが反逆天使を許すことはない、とはっきりいっているのだからこれは dramatic irony と受取れる。しかしここまで 悪魔に独白させることにより、詩人はかえって 悪魔の結局反逆を

やめられないという本質を明らかにしている。やはり彼は降伏することはできないのである。たとえ悔改めてもすぐまた逆もどりするであろう。そして神はこれをすべて見透している。結局この独白の結論としては、

…… all Good to me is lost;

Evil be thou my Good;⁽⁸³⁾

(私にはあらゆる善が失われた。悪よ私の善となれ)

という以外にない。善悪の価値が転倒しているのである。

さて、悪を善とし、自からが地獄になっている悪魔の姿と対照をなすものとして読者が思い起すのは、第十二章の終りでテデンの園を追われる直前のアダムであろう。キリストによる贖罪という希望をアダムに与えた後、天使ミカエルはこう言っている。

then wilt thou not be loath

To leave this Paradise, but shalt possess

A paradise within thee, happier farr.⁽⁸⁴⁾

(だからお前はこの楽園を去ることをいとわず、心の中に楽園をもつだろう。

その方がずっとしあわせなのだ)

これはミカエルの預言の結論である。これを読んで心配になるのはこれはミカエルの、ひいてはミルトンの自己満足ではないか、ということである。楽園を追われるのはやはりつらいであろう。第十一章、第十二章と色々教えられた結論が“a paradise within”とは少し弱くないであろうか。

十七世紀の混乱を経たミルトンの新しい秩序がここに示されているとすれば、それは内面の秩序である。清教徒のめざしたユートピアは簡単に来そうもない。といって新しい秩序はやはり必要である。それをミルトンは内面に求めたといえると思う。Rajan は「第十一章、第十二章におかれている背景は（十七世紀の）救いようのないペシミズムである」といっている。⁽⁸⁵⁾ 読者もそれを感じる。ミカエルのことばを聞いた読者が心から安心できるであろうか。にもかかわらず詩人は

答として「内面の樂園」しか与えていない。ストーリーの都合上それしかなかったのかもしれない。しかし私はそれ以上に積極的な意味をミルトンはこのことばにこめていると思う。「内面の樂園」はもちろんミルトンの信仰から出たことばである。個人の信仰はことばにしてしまえば単純なものである。しかしその中に、個人の体験によって深い意味をこめることができる。王政復古によって社会的立場を失ない、ロンドンの大火によって財産を失ない、すでに視力を失っていたミルトンは今まで信じていたものの意味をもう一度問い直したであろう。そしてその中に中心としてあったのはやはり信仰の問題であったろう。つまりミルトンは苦い経験を通してもう一度キリストの福音を深く体験し直したのだと思う。そしてそれをアダムの気持の中に表現したのである。さまざまな「混沌」を経たミルトンが新しい秩序として「内面の樂園」を示す時、そこには深く新しい意味が、体験をともなってふくまれていたのである。

(註)

- (1) George I. Duthie & John D. Wilson (ed.) *King Lear* (London: Cambridge University Press, 1960), p. 13.
- (2) Duthie & Wilson, *op. cit.* Introduction xliv.
- (3) Helen Darbishire (ed.) *The Poetical Works of John Milton* Vol. 1 (London: Oxford University Press, 1952), p. 112.
- (4) C. A. Patrides, *Milton and the Christian Tradition* (London: Oxford University Press, 1966), p. 68.
- (5) James H. Hanford & James G. Taaffe, *A Milton Handbook* Fifth ed. (New Jersey: Prentice-Hall Inc., 1970), p. 187.
平井正穂編「ミルトンとその時代」(東京: 研究社, 1974), pp. 131-132.
- (6) Darbishire, *op. cit.*, pp. 67-68.
- (7) *Ibid.*, p. 169.
- (8) 平井正穂編, 前掲書, p. 140.
- (9) Frank A. Patterson (ed.) *The Works of John Milton* Vol. IV. (New York: Columbia University Press, 1931), p. 330.
- (10) Patrides, *op. cit.*, p. 85.
- (11) I. Max Patrick (ed.) *The Prose of John Milton* (New York: Doubleday & Co.

- Inc., 1967), p. 160.
- (12) 聖書 (東京 : 日本聖書協会, 1971), p. 235.
- (13) William Haller, *The Rise of Puritanism* (Philadelphia : University of Pennsylvania Press, 1938), pp. 368-369.
- (14) 平井正穂「ミルトン」(東京 : 研究社, 1958), pp. 130-131.
- (15) G. M. Trevelyan, *England under the Stuarts* (London : Methuen & Co. Ltd., 1904), p. 195.
- (16) Haller, *op. cit.* pp. 267-268.
- (17) Patterson, *op. cit.* p. 277.
- (18) Darbishire, *op. cit.* p. 48.
- (19) Hanford & Taafe, *op. cit.* p. 194.
- (20) Darbishire, *op. cit.*, p. 152.
- (21) *Ibid.*, p. 49.
- (22) *Ibid.*, pp. 49-50.
- (23) *Ibid.*, p. 54.
- (24) *Ibid.*, p. 64.
- (25) Helen Darbishire (ed.) *The Poetical Works of John Milton* Vol. II. London : Oxford University Press, 1955), p. 155.
- (26) Darbishire, *The Poetical Works of John Milton* Vol. I. p. 74.
- (27) *Loc. cit.*
- (28) *Ibid.*, p. 75.
- (29) Harry Blamires, *Milton's Creation* (London : Methuen & Co. Ltd., 1971), p. 94.
- (30) Darbishire, *The Poetical Works of John Milton* Vol. I. p. 75.
- (31) *Loc. cit.*
- (32) *Ibid.*, p. 76.
- (33) *Ibid.*, p. 280.
- (34) B. Rajan, *Paradise Lost and the Seventeenth Century Reader* (London : Chatto & Windus, 1947), p. 76.